

よこはまみやげ

#10 横濱土産

作者：玉蘭齋貞秀（ぎょくらんさい・さだひで 1807-1879?）

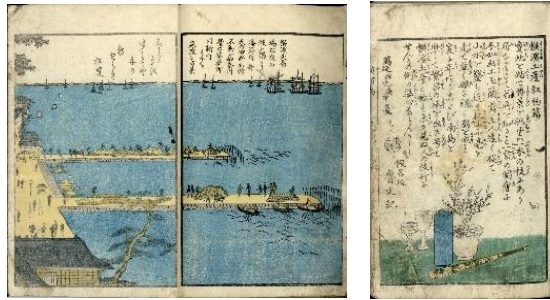
刊行：万延元年（1860） - 文久元年（1861）



📖 解題

■ 内容

本書は一寒村であった横濱が日米和親条約の締結に伴って、本格的に開港し繁栄している様子を画材にしたもので、内容は「横濱開港名所図会」ともいえる。



[K72. 1/91]

絵図の全部ではないが、描いた場所の説明文と発句を余白に記している。

全5篇で、各篇10丁からなる（『国書総目録』には4篇4冊とある）。初篇から4篇までは万延元年（1860）に出版され、最終の5篇のみ文久元年（1861）9月に出版され、刊行期間は2か年に及んだ。当館所蔵本は初篇と2篇を合本した2冊本で、合本したためであろうか、初篇の袋と表紙絵、各篇の奥付を欠いている。売り出された合本の組み合わせは何種類もある。

初篇は東海道芝生の横濱道の入口から吉田橋まで、2篇は本村・本牧が描かれている。当館未所蔵分では、3篇・4篇は港崎町で、特に4篇は岩亀楼にあてられている。5篇は横浜町と居留地が描かれている。本書は、開港直後の横浜の雰囲気伝えるとともに、歴史資料としての価値も高い。

出版元は、初篇の奥付では江戸の書肆「住吉屋政五郎」「岐阜屋清七」とあり、初篇の袋や表紙裏では「鳳来堂」となっている。

■ 作者

作者は玉蘭齋貞秀。本名橋本兼次郎、歌川氏を名乗り、一玉齋、五雲亭貞

秀などの号を用いた。作者は幕末の有名な浮世絵師で、横浜絵、特に一覧図（街や景色を俯瞰的に精密に描写したもの）や外国人の風俗を描いた。横浜絵とは、開港期から文明開化期にかけての横浜の町並みや風物、異人風俗や異国の風景・風物を題材とする錦絵を総称している。

横浜絵を描いた絵師は 50 人近くいたが、その第一人者といわれるのが作者であり、横浜絵を誰よりも早く手掛け、発刊の万延元年頃から精力的に制作に取り組んだ。初篇の巻頭に仮名垣魯文（1829-94）の記した序を載せる。

📖 本文を読む

<翻刻>

「特集／横浜開港名所図会（釈文）」（『たまぐす』第3号 横浜開港資料普及協会 1985）[K05.1/42/3]

<影印及び翻刻>

「横浜土産」（『横浜錦絵物語』斎藤竜著 新人物往来社 2009）[K72.1/196]

<現代語訳>

「横浜土産」半澤正時訳（『かながわ風土記』163、164号 丸井図書出版 1991）
[K05/17/162-167]

📖 参考文献

匠秀夫「横浜浮世絵と五雲亭貞秀」（『神奈川県美術風土記 幕末明治初期篇』神奈川県立近代美術館編 有隣堂 1970）[K70/2/1]

服部清道「『横浜みやげ』書誌考」（『郷土神奈川 第16-20号』神奈川県立文化資料館 1985）[K097/3/16-20] ※20号に掲載

『横浜浮世絵と空とぶ絵師五雲亭貞秀』神奈川県立歴史博物館 1997
[K06/57/97-11] ※展示図録